

ウィトゲンシュタインの 「規則に従う」論の若干の考察

子野日俊夫

序

規則に従うことをめぐる議論は、ウィトゲンシュタインが『哲学探求』『探求』においてとりあげているいくつかのテーマの一つであるが、周知のように、クリプキ（Saul A. Kripke）が一九八二年に『ウィトゲンシュタイン 規則と私的言語について（Wittgenstein on Rules and Private Language）』を発表して以来、その解釈をめぐる、活発な議論が展開されることとなった。そしてそうした議論の中心に、マルカムの言葉を借りれば以下のような解釈の対立がある。

「ウィトゲンシュタイン研究に逆説的な状況が存在している。規則に従うという概念についての彼の思想の解釈をめぐって不一致がある。哲学者たちの一方のグループによれば、ウィトゲンシュタインの立場とは、この概念は、これこれのことをおこなうことが、ある特定の規則に従うことになるのかもしれないのかに關する合意がそこにおいて存在するところの人々の共同体を前提する、というものである。哲学者たちの第二のグループには、このウィトゲンシュタイン解釈は誤りであるばかりでなく、ウィトゲンシュタインの思想を滑稽化するものでさえある。というのも、ウィトゲンシュタインが、規則に従うことは『実践』であ

ると言うとき、彼は社会的な実践を意味しているのではなく、また規則に従う者たちの共同体を持ち出しているのではなく、その代わりに彼は、規則に従うことは一定不変であること、行為が繰り返されることを前提していると強調するのであり、この一定不変であることは、ひとりて暮らしている人間の生活においてもその例証を求めうるのである。⁽¹⁾

すなわち、ある行為が規則に従うものであるかどうかを決定するために共同体の合意が必要であると考えるのがウイトゲンシュタインの真意であるとするとグループと、ウイトゲンシュタインは、単独に規則に従う人間の存在を認めているのである、と主張するグループがあるのである。われわれは、ここでは両グループをそれぞれ「社会合意派」「個人主義者」と呼ぶことにする。

本論は、この『探求』での「規則に従う」論に関して、中心的な諸節を検討することにより、ウイトゲンシュタインのこの問題についての主張がどのようなものであるかを、マルカムが右に述べている規則に従う際の社会性と個人性の問題について、どのように考えるのがウイトゲンシ

ュタインの真意にふさわしいのかを検討するなかで、考察する。

一

われわれはまず、上記の書でのクリプキの、ウイトゲンシュタインの「規則に従う」論の解釈を、ごく簡単に振り返っておこう。クリプキは、『探求』二〇一節の冒頭部分の、「われわれのパラドックスとはこういうものであった。規則はいかなる行為の仕方をも規定しえないだろう、なぜならどんな行為の仕方もその規則と合致させうるから」という文章をきわめて重要視する。彼は言う。「このパラドックスはおそらく『哲学探求』の中心問題である⁽²⁾」。そして、このウイトゲンシュタインの発言の中の、「どんな行為の仕方もその規則と合致させうる」という事態を、加算記号「+」を例にして敷衍していく。われわれは普段、⁽³⁾ +⁽⁴⁾ が +⁽⁵⁾ になるのを当然のこととしているが、クリプキによれば、これはけつしてそうなのではない。じつはこ

こでの + の意味は、

(1) x, y がともに $S7$ より小の場合は普通の加法を表すが、

(2) それ以外の場合は答えがいつも 1 となる、

というものであるが、ただこれまでのこの記号の使用においては(2)の場合が生じなかつただけなのである、というふうを考えることが可能である、とクリプキは言う。そうした使用方法を持つ演算記号に、彼はクワス *quasi* という新たな名を与えるわけであるが、要するに、どんな規則でもまだ有限回しか実行されていないわけであるから、それらの実行された場合がある特定のケースとして想定する、規則の新たな意味付け、解釈が成り立つ余地が⁽¹¹⁾つねにある、ということ⁽¹²⁾を彼は示そうとするのである。クリプキによれば、ここから一般に、「何かの語によつて何かを意味するといったことはありえない」という、「これまで哲学が目にした最も根源的かつ独創的な懐疑論の問題」が生じることになる。これが先のパラドックスでウイトゲンシュタインが言おうとしたことなのだ、というわけである。

では規則に関して、どんな行為でもそれに従つたものと

みなせるとしたら、ある行為が規則に従つたものであるかどうかについてはまったく何も言えなくなつてしまうのであろうか。クリプキによれば、「規則に従っていると主張する人はだれでも、他の人々によつてチェックされる」のである。すなわち、何が規則に従う行為であるかは、共同体の合意に基づいて決定される、というわけである。

以上が、クリプキによる、ウイトゲンシュタインの「規則に従う」論の解釈のごく大まかな骨子である。

このクリプキの解釈の是非を考えるために、われわれはあらためて、彼が問題とした『探求』二〇一節の全文を掲げよう。

「われわれのパラドックスとはこういうものであった。規則はいかなる行為の仕方をも規定しえないであろう。なぜならどんな行為の仕方もその規則と合致させうるから。それに対する答えはこうだった。どの行為のし方も規則と合致させられるのであるならば、それはまた合致させないこともできる。したがって、ここには合致することも合致しないことも存在しないだろう。」

ここには誤解があるということは、以下の点においてすでに示されている。すなわち、われわれはこうした思维的過程において、解釈に解釈を連ねている、という点とである。あたかもどの解釈も少なくともある瞬間はわれわれを安心させるが、それもわれわれが、またこの解釈の後ろにひかえる解釈を考えるまでの間のことでしかない。このことよってすなわちわれわれは、解釈とは違う、規則の把握が存在する、と説明するのである。それは、規則の適用の各場合に応じて、われわれが「規則に従う」「規則に従わない」と呼ぶ事態の中に表現される、そうした把握である。

それゆえ、規則に従うどの行為も解釈である、と語る傾向がある。しかし、規則のある表現を別の表現で置きかえることをのみ、人は「解釈」と呼ぶべきである¹⁾。

この節でワイトゲンシュタインは、規則に従うことをめぐってパラドックスがある、と確かに語っている²⁾。つまり、ふつう規則とは行為の仕方を規定するものと考えられているが、実はどのような行為でもその規則と合致させうるの

であって、したがって規則は行為を規定し得ないのだ、というパラドックスである。われわれはクリプキが挙げているその例を、さきほど簡単に見た。

しかしパラドックスが生じる場合、そこには多くの場合誤解が潜んでいるものである³⁾。ワイトゲンシュタインはこのパラドックスに関してもそうした誤解がある、と考える（ここには誤解があるということは……）。そしてその誤解とは、ワイトゲンシュタインによれば、規則とは解釈されるものである、と考える誤解なのである。規則をそのようなものと考えて、一つの解釈を与えても、すぐにまたそれとは別の解釈が思いつかれ、そうやっていつまでたっても最終的決定的な解釈が得られない。しかし実際にはそのようなことは起こってはいない。であるから、「このことよってすなわちわれわれは、解釈とは違う、規則の把握が存在する、と説明するのである」とワイトゲンシュタインは言うわけである。規則を解釈でもって把握しようとしたからパラドックスが生じた。それなら、その誤りを正せばパラドックスも解消する、というのがワイトゲンシュタインの考えである。であるから、これはすでに

多くの者が指摘していることであるが、この点において、パラドックスの内容そのままを、ワイトゲンシュタインの最終的な立場と解するクリプキの解釈は誤りである、ということになる。

ちなみに上記二〇一節の最後の段落は、「解釈」という語の意味を限定している。規則に従った行為自体を「解釈」と呼ぶこともあるが、ここでワイトゲンシュタインが「解釈」と呼ぶのは、規則の表現を別の表現で置き換えることを、である。その冒頭の「それゆえ」は、第二文に掛かる、とわれわれは考える。

では、その「解釈とは違う、規則の把握」とはどのようなものなのか。

続く二〇二節が、そのことに対するワイトゲンシュタインの解答を与えている。それは以下の通りである(数字は本論者の挿入)。

1 それゆえ「規則に従う」というのは実践である。2
そして規則に従うと信じることは、規則に従うことではない。3 またそれゆえひとは規則に「私的に」従うこ

とはできないのである。4 なぜなら、さもないと、規則に従うと信じるのが規則に従うことと同じことになってしまうであろうから。

まず冒頭の「それゆえ」は前節をうけている、と考えるのが当然であろう。そうだとすると、文1で言う「実践」とは、単にあれこれと頭の中で解釈することと区別される、つまり思惟に対する実践の意味と理解される。では次の文2の、規則に従うと信じることに規則に従うことの区別とはどのようなものか。今の文1の解釈からすれば、規則に従うと信じるとは、単に頭の中だけで規則を解釈することであるとも考えられるが、そうとる必要はない。文2の「そしてand」は、また新たなことを述べる「そして」である。つまりここでもあくまでも実践を問題としつつも、その行為者が規則に従っていると信じて行為しても、単にそれだけでは、その行為が規則に従うものにそのままなるのではない、とワイトゲンシュタインは言っているのである。では行為者個人の行為を、規則に従ったものとするのは何なのであろうか。

その前に文3と文4を見ておくと、次の文3は文2の、単に「信じる」という事態を、「私的」という別の表現を用いて述べただけのものである。その冒頭の「またそれゆえ Und darum」は、文1から文2へのつながりとは違って、文3が文2の論理的帰結であることを示している。したがってまた文4は、文2と文3の論理的関係の、単に対偶を述べているにすぎない。

二

ではさきほどの、実践を規則に従ったものとするのはどのような条件であろうか。この点こそがまさに、社会合意派と個人主義者との争点である。

まず前者の代表として本論の冒頭にも登場したマルカムは、次のように述べる。

「彼〔ワイトゲンシュタイン〕が二〇二節で言い表している絶対的に根本的な重要性を持つ考察は、人が規則に従うことと規則に従うと人が考えることとの間の区別である。

まったく人間社会に属したことの無い人物が、自分で規則を作ってそれに従おうとする場合をあなたが想像してみるならば、そうした区別の足場がないことにあなたは気づくであろう」^(五)。

つまり個人が単独で規則に従おうとする場合には、その人間には、自分が単に規則に従っていると信じているだけなのか、あるいは本当に規則に従っていると言えるのか、その区別を明確にしうる基準が見つからないはずだ、というわけである。「もし単独の個人が規則の意味を決定できたとしたら、この区別はなされえないであろう」^(二〇)。逆にワイトゲンシュタインがこの区別をしているということから、規則に従うということは一人の個人によることではなく、社会的なものであると彼が考えていたことが帰結する、とマルカムは考えるわけである。文3の「ひとは規則に『私的に』従うことはできない」というのも、「一人の人間の行為には、それが私的なものであろうと公的なものであろうと、ある規則の意味を確定することはできない」^(二二)ということを意味する。

こうした、規則に従う行為をつねに社会性と結びつける

解釈に対して、ワイトゲンシュタインは独りだけで単独に規則に従う人間の存在を認めている、と主張する人々がいる。そうした人々をわれわれは先に個人主義者と呼んだわけであるが、ここではその代表として、ペーカー（G. B. Baker）とハッカー（P. M. S. Hacker）の共同の議論（以下「ペーカーハッカー」）を主として取り上げよう。

彼らは、一見規則への個人主義的な従い方を拒絶しているように思える、上記の二〇二節に關しても、以下のよう
に考える。

「ここでの『実践』が社会的実践を意味しているとするのは間違った解釈である。ここでの対比は独唱と合唱のそれではなく、譜面を見ることが歌うことのそれである。『実践』の語はここでは、『理論においてと実践において』という語句と同様の意味で用いられている。^(一三)

すなわち、二〇二節冒頭の、「規則に従うというのは『実践』である」では、単独の個人による実践とは異なる、社会と連携した実践が意味されているのではなく、単なる思惟ではなく実践である、ということが述べられているのだ、と彼らは主張するのである。そして、「この議論には行為

者が多数であることへの言及は全然含まれていないことに十分注意せよ。強調はまったく、一定した繰り返し(Cyclicity)に、行為の多数回の生起に、置かれている。^(一四)

また同節での、実際に規則に従うこととただ単に規則に従うと信じることとの区別に關しても、ペーカーハッカーは、「ある人が規則に従っているのか、あるいは規則に従っていると考え違いしているのか」ということは、他の人たちがしていることあるいはするかもしれないことには依存しない^(一四)とする。

つまり実践を規則に従うものとするのは、個人の実践が規則性をもって繰り返されることにあるのであって、そこに他の人達は関与するわけではない、というのが彼らの主張である。

三

では、こうした二つの立場に対して、われわれはどちらを是とすべきであろうか。

まず、規則に従うとは「慣習、制度」^(一五)である、とウイトゲンシュタインは語っている。また『数学の基礎に関する哲学的考察』(『数学の基礎』)においては、洞窟で一人で壁に点と線分からなる反復模様を描いている人間を想定し、「しかし彼は規則という一般的表现に従っているのではない。われわれは、彼が規則的に行為している、とは言わない。なぜなら、そのような表現をわれわれは形成し得ないからである」^(一六)と語っている。したがって規則は社会を前提する、とウイトゲンシュタインが考えていたことは確かである。であるから、ペーカーハッカーが考えるような、生まれたときから独りで成長してきた人間を想定し、そうした人間の、規則に従う行為を論じることが、たとえそれが論理的に可能であるとしても、問題外と言わねばならないであろう。

では社会合意派の主張がそのまま受け入れられるものなのであるか。マルカム自身、個人主義者の主張に一定の理解を示し、それを「哲学的思惟の自然な傾向」^(一八)と呼び、また社会合意説に反対するのは「哲学者の直観」^(一九)であるときさえも語っている。もちろん彼にとっては、そうした自然

傾向や哲学的直観を批判することこそウイトゲンシュタインの立場である、ということになるのであるが、しかしもしマルカムが言うように、規則に従うことの個人主義的解釈が本当に哲学的思惟の自然的傾向であり、そこに哲学的直観が見られるということであるならば、やはりそこになんらかの真实性が含まれていることになるのではないだろうか。

そこでわれわれは、社会合意派の見解に不十分性を指摘したいのであるが、それは要するに、ある規則に関して、何がその規則の意味であるかについての社会的合意があるとしたら、それは規則の一つの「解釈」とはなってしまうのではないだろうか、ということである。この点をペーカーハッカーも突いている。「共同体の合意は『客観的』解釈の役割をはたす」^(二〇)。これは先に見た二〇一節でのウイトゲンシュタインの主張、すなわち求められるべきは解釈とは異なる規則の把握である、という主張に反することに

なる。われわれは、人から規則への従い方を教え込まれていながらそこに社会的合意を見ないことが可能である、と主張

したいのであるが、はたしてそれはどのように可能であろうか。われわれはそれを、ウイトゲンシュタインの「生形式 (Lebensform)」を最大限に活用して解釈することで試みたい。⁽¹¹⁾

われわれはここで、個人の生形式というものに注目したい。ウイトゲンシュタインは、「一つの言語を表象することとは、一つの生形式を表象することである」(『探求』一九節)と述べて、一つの言語に一つの生形式が対応するように語ってはいるが、言うまでもなくその生形式は各個人において表現されるものであり、個人の生形式を問題とすることができる。そしてその個人の生形式とは、単にマルカムが述べるような「日々のあいさつ」⁽¹²⁾といったレベルのものばかりではなく、まさに生きていく上での基本的な形の全体を含むものであると、われわれは考える。であるから、道しるべの見方を覚えてそれに従って行動することもまた一つの生形式である。

さて、われわれは道しるべの見方をどのようにして知るようになるかといえば、当然親なり教師なりによって教えられるわけであるが、それはウイトゲンシュタインによれ

ば、道しるべの解釈を教えられるのではないことになる。ではそこで何がなされるかといえば、生形式の一つの要素が教え込まれるのである。しかも教える側と教えられる側とが道しるべに関して同じ生形式を持つべく教えられるのである。『探求』二四一節で「言語において人々は一致する。これは諸意見の一致ではなく、生形式の一致である」⁽¹³⁾と言われるが、人々において生形式が一致しているばかりではなく、人はそれを一致させるべく社会の新参者を仕込むのである。

このようにしてわれわれは一般に規則を教えられてそれをわがものとす。しかしいったんそれが教えられるや、もはやそれは当人の生形式となり、彼自らの生に固有のことと自覚するようになるのである。『探求』二一九節に言われる。

「私が規則に従うとき、私は選択しない。私は規則に盲目的に従う」。

これは規則に従う行為が当人の生形式となつていゝことを示すものである。であるから、道しるべの見方は、なるほど社会的取り決めとして始まるものではあるが、いった

んその見方を教え込まれ習得された後は、それは各人の生形式の中に組みこまれていく。であるから、他の人とその道しるべの見方が一致することを、人は決して合意によってそのようなのだ、とは考えないであろう。単に道しるべとはそういうものなのだ、と考えるであろう。

したがってまた、「実践を規則に従ったものとするのはどういう条件であるか」という、二の冒頭での問いに対しても、それは端的に言えば社会的慣習ではあるが、同時にそれは実践する各人の生形式となった慣習である、と答えよう。

以上論じてきたことよってわれわれは、「規則に従う」ことに関する社会合意派と個人主義者の主張のそれぞれに首肯すべき点を認めつつ、単純にどちらか一方を是とするのではない第三の道を、ある程度示しえたと考える。

四

ワイトゲンシュタインには、規則に従って行為する際の

社会性と個人性に関して、統一的な結論にまで到達できなかった、ということがあるように思える。

『数学の基礎』で、ワイトゲンシュタインは次のような問題を提示している。

「計算する人達の合意のない算術は可能であろうか。

独りだけの人間は計算しうるだろうか。独りだけの人間は規則に従いうるだろうか。これらの問いは、『独りだけの人間は商売を営むことができるか』という問いと、いくらか似ているだろうか。」^(二四)

この最後の問いに関して、社会合意派マルカムは当然のことながら、肯定的な答えこそがワイトゲンシュタインの考えであるとする。^(二五)つまり独りだけの人間には明らかに商売を営むことが不可能であるのと同様に、独りだけの人間が計算をしたり規則に従ったりするのも不可能である、というのがワイトゲンシュタインの考えである、とする。これに対して個人主義者のベーカーハッカーの側では、これも当然のことながら、「答えは明らかに否定である」とする。^(二六)しかし、ベーカーハッカーも認めているように、ワイトゲンシュタインは答えを保留したままである。それ

は彼の中で答えを出すところまで、あるいは答えを言葉で表現できるところまで進めなかったからだ、と考えるべきではないだろうか。個人で規則に従う行為について、もちろんその個人が生まれつき社会からまったく隔離した存在である場合は別として、ある種の社会性を備えた存在である場合には、その行為は、そこから社会に通用するにいたる規則の発現の可能性を秘めている、といえるのではないだろうか。そうした可能性からして、ワイトゲンシュタインの中で最後まで決め兼ねる点があった、ということではないだろうか。後期ワイトゲンシュタインにあつては「私的言語批判」に見られるように、言語の公共性の強調が見られるわけであるが、「規則に従う」論では、まさに個人の行為が問題とされる場面を含むのであり、個人と社会との関係をめぐって、言語一般に対するのとは違う視点からの考察が求められることになる。この問題に関しては、ワイトゲンシュタインの生形式について、美学的方面もからめてより深い理解を持つことにより、さらに説明を進めることができるはずである、というのがわれわれの当面の結論である。

註

- (一) Norman Malcolm, Wittgenstein on Language and Rules, in *Philosophy* 64 (1989) (以下「マルカム 1989」) p.5.
- (二) Saul A. Kripke, Wittgenstein on Rules and Private Language, 1982 (以下「クリプキ 1982」) p.7.
- (三) クリプキ 1982, p.55.
- (四) クリプキ 1982, p.60.
- (五) クリプキ 1982, p.101.
- (六) そこで過去形(「われわれのパラドックスとはこういうものであった」)が用いられているのは、一九八節の「どんな解釈も、解釈されるものとともに宙にぶら下っている。解釈は、解釈されるもの支えとなりえない。解釈だけでは意味を規定しない」を受けてのことと考えられる。
- (七) たゞえば有名な、アキレスが先を行く亀に「いつまでたつても」追いつけないというパラドックスでは、アキレスと亀について考察するわれわれにおいて経過する時間を、アキレスと亀において経過する時間と取り違えるという誤解が、また運動の本質に対する誤解が存在するように、多くのパラドックスには何らかの誤解がひそんでいる。
- (八) たゞえば、C. McGinn, Wittgenstein on Meaning, 1984, p.43. あらうは E. von Savigny, Wittgensteins "Philosophische Untersuchungen" Ein Kommentar für Leser, Band I, 1994, S.250.
- (九) マルカム 1989, p.28.
- (一〇) Norman Malcolm, Nothing is hidden, 1986 (以下「マルカム 1986」) p.156.
- (一一) マルカム 1986, p.156.
- (一二) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, Scepticism, Rules, and Language,

1984 (以下「ペーカー＝ハッカー 1984」) p.20.

(一三) ペーカー＝ハッカー 1984, p.20.

(一四) ペーカー＝ハッカー 1984, p.70.

(一五) 『探求』一九九節

(一六) *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*, VI, 41, Wekausgabe Bd.6, S.344.

(一七) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Rules, Grammar and Necessity*, 1986 (以下「ペーカー＝ハッカー 1986」) p.172.

(一八) マルカム 1989, p.27.

(一九) マルカム 1986, p.175.

(二〇) ペーカー＝ハッカー 1984, p.70.

(二一) 生形式に関しては、最晩年の草稿『確実性について』の中に次のような箇所がある。

「ひとはこう言えるかもしれない。『私は知っている』は、まだ争いの中にある確実性をではなく、安心した確実性を表現してゐる』」(三三七節)。

「私はこの確実性をなにか性急なものに似たものとは見なさない。それを(ある)生形式と見なす(これは非常に拙劣に表現されている、そしておそらく拙劣に思惟されてゐる)」(三五八節)。

ここにワイトゲンシュタインの生形式に対する考え方がよく表されている。つまり、「私は知っている」ということは安心のある確実性を伴うが、それが一体どこから来るのかといえば、生形式から来る、とワイトゲンシュタインは一方では言うわけである。しかしただ生形式と言ひ放つてしまつてはそれで論究がとまつてしまうので、それはまた非常に拙劣な表現であり思惟であることを、彼は自覚しているのである。生形式というものに対する確信があるが、それ以上に言葉を継ぐことができないわけである。

であるからわれわれも、この語の使用には十分警戒すべきではあるが、しかし生きていく上での、人と人との前言語的一致を生形式の一致と表現したい。

(一一) マルカム 1989, p.23.

(一二) ハッの「諸意見の一致」と「生形式の一致」とには、意見に関しては複数形、生形式に関しては単数形という「際立った対照」(Von Savigny, *ibid.*, S.282)がある。意見というものは人によつてさまざまであるのに対して、生形式は人々において初めから一致している、あるいは各人の生形式には万人共通の側面が厳然としてあり、という認識が、意識的か無意識的かは別として、ワイトゲンシュタインにあったと見えよう。

(一四) 『数学の基礎』p.349.

(一五) マルカム 1989, pp.21-22.

(一六) ペーカー＝ハッカー 1986, p.140.

(一七) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *Malcolm on Language and Rules*, in *Philosophy* 65, 1990, p.175.

(一八) ウイトゲンシュタインにとつては「概念的にして美学的な諸問題」だけが肝心な問題であつた(一九四九年の覚え書き。Vermischte Bemerkungen, Wekausgabe Bd.8, S.563)。

Some Remarks on Wittgenstein's "Following a Rule"

Toshio NENOHI

Since Saul A. Kripke published a vigorous book, *Wittgenstein on Rules and Private Language* in 1982, the problem as to following a rule in Wittgenstein's *Philosophical Investigations* has been discussed frequently.

Wittgenstein says in §202 of this book that following a rule is a practice and he draws a clear line between to follow a rule and to think one is following a rule. Then a question arises. What distinguishes following a rule from thinking one is following a rule? Answers are divided into two groups. One group asserts that the criterion is a general agreement of the community on what acts accord with what rules. Kripke and Norman Malcolm represent this group. Another group insists that it only needs a regularity of action by a single person to make his action following a rule. The representatives of the latter group are G.P. Baker and P.M.S. Hacker.

Judging from the Wittgenstein's words ('uses' or 'institutions') in §199, the former group seems to interpret him correctly. But then, should we act in accordance with the agreement of the community? As Norman Malcolm himself recognizes, this interpretation goes against the 'intuitions' of philosophers.

So we try to find a third way to solve this problem. The key word is a 'form of life.' Children are trained by teachers or parents as to how to react to a sign-post. I think this reaction is also a form of life. And as Wittgenstein says in §241, human beings have a agreement in form of life. This is not a mere fact but also a social demand. A father trains a child so that their forms of life accord with each other. But once the child is trained to react to a sign-post in a particular way, the form of life becomes *his* form of life. He needs no more the agreement of the community. So it is not correct to say that we act in accordance with the agreement of the community. We act to some extent socially and at the same time to some extent individually.